

情報検索演習における近年の学生の傾向

Report on tendency of information retrieval practicum

中島 玲子

はじめに

2003年に本学の非常勤講師となって、丸10年が過ぎた。初年度から一貫して全学共通科目の「情報リテラシー」を担当し、並行して2年目からは図書館学課程の「情報検索演習Ⅱ（現行カリキュラムでは「情報サービス演習Ⅱ」）を担当している。本稿では、この10年の学生の授業態度やITスキル、気質の変化について、気がついたところを述べてみたい。

学生の受講態度の変化

着任当初、亜細亜大学の学生のイメージはよく言えば元気、悪く言えばうるさく、授業中も私語が多かった。その中で図書館学課程は真面目でおとなしいというイメージがあったが、最近では、一般の学生も総じて真面目になってきているので、それほど差異はなくなってきている。ただ、資格取得という目的のために通常より多くの授業を履修しているため受講動機は高い。だが、積極的に発言したり質問したりする学生は以前より減り、受け身になっているようにも感じられる。

「ゆとり世代」の次の「さとり世代」¹⁾とも言われる彼らだが、いわば省エネルギー型というか、無駄なことはせず、淡々と授業を受けて授業終了後は淡々と去っていく。以前は出席状況について過剰に反応する学生もいたが、全体的に欠席や遅刻は増えている。課題提出に関しても未 completion であったり、提出日を守らなかった

り、決まりごとに対してルーズになってきているのも昨今の傾向である。

情報検索演習の授業は毎回PC教室で行い、情報源であるデータベースの説明、課題出題、課題の答え合わせというサイクルで進めている。答え合わせでは回答や発言ごとに授業貢献度としてポイントをつけることにしているが、回答に自信がないのか、なかなか発言が出てこない。発言を引き出そうとして次々と質問を投げかけるが、その場で考えるということも苦手なようで、思考停止して黙り込んでしまう学生が少なくない。その場その場で誘導されて回答に至る学生もいるが、逆にポイントを稼ごうとしてとにかく発言を重ねる学生もいる。

「デジタルネイティブ」世代のITスキル

今の在学学生は生まれた時からデジタル機器に囲まれて、インターネットが当たり前である時代に育っているいわゆる「デジタルネイティブ」である。幼少期から自宅にPC（パーソナルコンピュータ）があるのは珍しくなく、高校時代に教科「情報」が必修となっているので、PCの基本的スキルはある。しかし、アプリケーションソフトの細かい使い方については体系的な知識があるわけではない。よって極端にスキルが低い訳ではないが、PCに苦手意識を持っている学生は毎年少なからずいる。これは本学の学生に限らずこの世代の若者全般に言えることであり²⁾「デジタルネイティブ」であるという前提のもとに授業を進めていくと思わぬギャッ

ブに陥ることがある。

図書館における情報検索はデータベースなど情報源に関する知識も必要だが、利用者の情報要求に応じて素早く回答を出す必要がある。検索に用いるのは PC が主流なので、ある程度のタイピングの速さが求められる。両手を使ってキーボードの手元を見ずに入力するタッチタイピングができればなおよい。

一時期、速さはともかくタッチタイピングができたり、我流でも早く入力ができたりする学生が多くなっていたが、最近はまだ PC のキーボード入力にもたつくという学生が増えている。これは、スマートフォンやタブレット端末の普及により、フリック入力や予測変換に慣れてしまい、PC を使う機会が減っているのが要因と考えられる。

一方で、ひところ見られたような授業中の PC の私的利用は減ってきたが、片時もスマートフォンを手放せない学生もおり、PC 教室では、教室に入るなり PC にスマートフォンのケーブルをつないで充電し、授業中も Twitter や LINE 等で頻繁に連絡を取り合っているような様子が観察される。

検索技術の進歩による変化

Web ページの爆発的な普及とともにサーチエンジンによる検索が日常化し、検索システムが洗練されることにより、検索方法が以前に比べて格段に容易になった。もはや検索にあたっては高いスキルを必要としなくなっている³⁾。サーチエンジンの入力ボックスにキーワードを入れて検索すれば何かしらの検索結果が提示される。物体や人物であれば画像検索が、機関名であれば地図検索が、というようにデータベースをまたいだ検索をサーチエンジンが勝手にできない、付帯的な情報まで自動的に出してくる。日本語以外のページには翻訳機能もついている。

また、一般的にサーチエンジンで検索すると「フリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia)」

の該当項目が検索の都度つねに上位に表示され、各項目は小ネタに至るまで記述とリンクがしてある。授業で知識を得た各種の情報源に個別に当たって「こんなことまで調べられるのか！」というような新鮮な驚きや達成感を実感しにくいものになっている。

一方で、確固たる目的や戦略を持たずに検索を始めても何かしらの回答が表示されるので、本来ならば検索意図に沿った情報を評価して取捨選択をすることの重要性は増しているにもかかわらず、学生の様子を見ていると、なんとなく調べてなんとなく出てきたものから検索結果をよく読まずに回答することがある。逆に、正解につながる情報が載っているサイトに当たったとしても、そこから情報を読み取れない学生が増えている。あるいはそこで見つからなければさらに別の検索を行わずにあきらめて回答不能としてしまうことも多い。検索対象が英語のページとなるとお手上げである。

一般的なサイトの構造として、重要事項やよく利用される項目についてはトップページや層の浅いページに記載されるが、トップページの記述を読まずにすぐサイト内検索に頼ってしまう学生も多い。このため、検索語としてヒットした情報が関連度の低いものまで見つかりすぎて、深みにはまって求められている回答からかけ離れた情報をどんどんたどっていく学生も少なくない。ある意味泥臭い方法で、まず全体の構造を眺めてみるのが重要であると再三授業では言っているが、真面目な学生ほどこのループに陥りやすいようである。

情報の効率の良い探し方といえば、たとえば、情報の信ぴょう性から学術情報の面で Wikipedia を情報源として用いるのは歓迎されていないが、実際のところ、Wikipedia はあるトピックの概要をつかむのは便利なツールである。新しいトピックについてもすぐに項目が作られ、知るのには、大変便利なツールである。きちんと情報の評価ができる人間であれば、ここを起点としてさらなる検索に進んでいくとい

うやり方はある意味効率がいい。このため、得た情報の信ぴょう性、確実性、鮮度などを見極める、情報の評価が重要になってくる。

情報検索の敷居が低くなっているのは、一般の図書館利用者でも同じ状況である。そこで、情報メディアの構造を理解し、効率の良い検索ができ、情報の評価という面で利用者をリードできるというのは、情報の専門家として差がつくポイントとして重要である。

情報過多の時代に生きる学生たち

検索ツールの充実により簡単に情報が検索でき、常にスマートフォンなどの携帯情報端末を手に行っている彼らは、一見自由自在に情報にアクセスしているようだが、おびただしい量の玉石混交な情報に振り回されているようにも見える。瞬時に入手できるインターネット上の情報源にあまねく触れているように見えて、実はその時点で偏った情報になっていることは実感できていないようである。

検索に当たっては、きちんと検索戦略を立て、また検索結果を評価することが必要なのだが、やみくもにただ検索するだけで、目の前にたまたま出てきたものが回答であり、それ以上に深めて調べたり評価したりすることを思いつかないようである。

検索課題が与えられた時、与えられた問題文に記載されている「キーワードらしき文言」を検索語としてとりあえず検索し、目の前にある情報に検索語に類似する文言が見えたらそれが答えのすべてであり、その情報の妥当性があるかどうかを吟味する発想や、想像力にはかけているように思われる。また、より信憑性がある上質な情報があったとしても、それを求めようとせずに、自分の中の知識の範囲内で、自分だけのがんばり（自己満足）や思い込みで終わってしまっているようにも見える。

また、最近目立つのは、一般常識の欠如というか知的好奇心の薄さである。検索演習に用い

る課題は、学術文献情報や事実情報などが主だが、学生が興味を持って取り組めるよう身近なトピックスを取り上げるように心がけている。しかし、たとえば、検索課題としてノーベル賞や芥川賞を取り上げたとしても、それがいったいどういう賞で、どういう時期に発表されるかも知らないし、わからなければ調べようとしめない。また答え合わせの時に回答を読み上げる可能性があるのに、英単語や漢字の読みがわからなくても調べてこない学生は多い。

これは決して情報不足なのではなく、むしろ触れられる情報が多すぎて、情報そのものに疲弊しているような印象を受ける。

今後の課題

ここまで昨今の受講生の変化と傾向について述べてきたが、将来、図書館司書（＝情報の専門家）となった場合、やはり必要となるのは、水先案内人として、利用者をリードする力である。

そのためには、より上質な情報を求めて高みをめざすという経験が必要であり、広くて深い知識、知的好奇心を涵養する機会や動機づけが求められる。

また、早い時期からインターネットや IT 機器に慣れている反面、情報モラル（著作権・セキュリティ・マナー）について、実感として理解できているとは言い難い。社会に出る前に情報倫理について学ぶ最後の機会でもあるので、情報倫理に関しても、前述の情報の評価同様にきちんと身につけたいものである。

レファレンスサービス（質問回答サービス）では、カウンターで利用者と相対して質問を受け、その場で調べて回答する技能が求められる。そのためにも効率の良い検索力はもちろん連想力や思考の瞬発力を養っていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 原田曜平(2013)さとり世代 盗んだバイクで走り出さない若者たち.角川書店.
- 2) danah boyd(2014)It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens. Yale University Press.
- 3) 大谷康晴編(2011)情報検索演習 (JLA 図書館情報学テキストシリーズ 2-6).日本図書館協会.